桐生市の文化財概要説明

桐生市教育委員会

凡例
重：重要文化財
天：天然記念物
史：史跡
無：無形民俗文化財

● 重要文化財（国指定） 7件

1 重　旧群馬県衛生所　附棟札一枚

群馬県衛生所として明治11年(1878)に前橋に建築された疑洋風建造物である。昭和3年(1928)に相生村役場としてここに移築され、現在は桐生明治館の名称で公開されている。

2 重　上野千網谷戸遺跡出土品

千網谷戸遺跡は関東地方の縄文時代晩期を代表する遺跡で、出土品の耳飾りなどや石器など3,297点が県立博物館に寄託中で、耳飾のレプリカが絹撚記念館に展示されている。

3 重　銅造阿弥陀如来及両脇侍立像

鎌倉期に製作された、善光寺式阿弥陀三尊仏の銅製鋳抜き立像で、中央に高さ55cmの阿弥陀如来、脇侍に観音・勢至菩薩を配す。青蓮寺の本尊で、秋の彼岸中日が開帳日。

4 重　彦部家住宅

永禄4年(1561)に屋敷を構え、中世豪族の屋敷構えが良く残る。江戸時代の長屋門、冬住み、穀蔵、文庫蔵と明治～大正時代に建て替えられた主屋で構成される。関東最古級民家。

5 重　塔婆　石造三重塔＝山上多重塔＝

通称山上多重塔と呼ばれ、造延暦20年(801)、高さ185cmの塔婆・石造三層塔である。「道輪という僧侶が、すべての人々が永く幸せに暮らせるよう建てる」旨の文字が刻まれている。

6 重　天満宮（本殿・幣殿・拝殿、末社春日社本殿）

天正19年(1591)ここに遷座された。現在の本殿・幣殿は安永7年(1778)から15年かけて完成し、極彩色の彫刻がある。拝殿は簡素な造りで享和2年(1802)の上棟となる。

7 史　武井廃寺塔跡

中央に穴のある円錐状の安山岩加工石である。形が塔の心礎と似ていることから、古代寺院の塔跡と考えられてきた。現在は奈良時代の火葬墳墓との見解が重視される。

■ 県指定文化財　23件

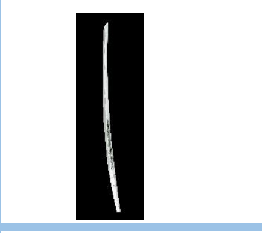
1 重　西方寺木彫阿弥陀如来像

鎌倉時代に造られた高さ59cm、寄木造りの結跏扶座像である。顔と肉身は金泥が塗られる。桐生國綱が西方寺を建立した際に本尊として安置した。桐生氏の菩提所である。

2 重　崇禅寺木彫阿弥陀如来像

像高130cm、5個の檜材の寄木造、鎌倉末期の全身漆箔の阿弥陀如来立像である。園田太郎成家が法然の教えに帰依し出家後、京都から動座したとされている。

3 重　刀　銘一竿子忠綱雕同作



元禄8年(1695)作の長さ69cm、反り1.5cm、目釘穴1個の日本刀である。名刀工近江守忠綱の二代目の作で、刀の表に真の剣巻龍、裏に毘沙門剣が彫ってある。

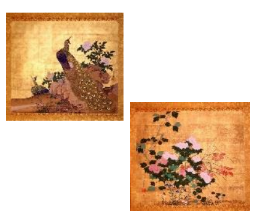
4 重　刀　銘(巴紋刻印)於東武藤枝太郎英義作之

慶応2年(1866)作の長さ71.7cm、反1.0cm、目釘穴1個の日本刀である。巴紋が大きく彫られ, 他に「於東武藤枝太郎英義作之」と「慶應二寅年八月吉日」と刻印されている。

5 重　大雄院刺繍涅槃図

宝永2年(1705年)につくられた刺繡物の涅槃図である。縦横2. 4mほどで、絹布地に金糸と五彩の太絹を細い絹糸で綴ってある。大雄院4世格雲が発願し、完成させた。

6 重「秋草花卉図　酒井抱一」「孔雀牡丹図　谷文晁」



江戸時代に描いた酒井法一の秋草花卉図と、谷文晁の孔雀牡丹図である。桐生の佐羽家が買い取り菩提所浄運寺に寄進したもので、共に県立博物館に寄託されている。

7 重　関の磨崖仏

推定鎌倉時代、高さ128cm、幅80cm、奥行80cmの凝灰岩に彫られた、三尊像の魔崖仏である。中央に阿弥陀如来、脇侍に観音・勢至菩薩像を刻んでいる。

8 重　虚空蔵菩薩像

医光寺に伝わる永禄元年(1558)鋳造の像高20cmの虚空蔵菩薩座像である。小沼神の本地仏が虚空蔵で、ちなみに大沼が千手観音、山頂が地蔵として信仰されていた。

9 重　紺紙金泥虚空蔵菩薩経

医光寺に伝わる13世紀初期と見られる、全長約14m 、幅26cm、紺色の紙に金泥で書写した藤原経、5巻の内の第1巻である。虚空蔵菩薩像と一緒に伝来したと推定される。

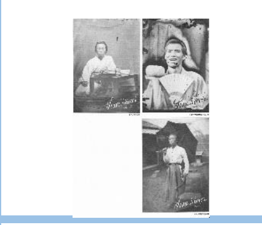
10 重　常鑑寺の梵鐘

寛延元年(1748)に下野国佐野の丸山善太郎毎昭によって鋳造された高さ85.5cm、口径61.2cmの梵鐘である。撞座の 上に聖観音座像が半浮彫りされている。

11 重　栗生神社本殿　付　棟札

寛政2年(1790)に建てられた一間流れ造りの神社である。関口文治郎らによる彫刻が本殿全体を覆っている。棟札により建造年代、大工、彫物師など建設者が分かる。

12 重　島霞谷・隆夫妻関係資料



幕末期に活動をした、洋学者で絵師、写真家の霞谷と日本で最初の女性写真師、妻隆の写真資料、絵画資料、鉛合金活字など全1, 028点である。県立歴史博物館に寄託中。

13 天　「伝承」桐生大炊介手植のヤナギ

推定樹齢400年とされるアカメヤナギで目通り0. 7m、樹高3mである。樹勢が衰え、隣の子木の方が大きい。父繁綱の死を悼み子大炊介助綱が植えたと伝えられる。

14 天　相生のマツ

樹齢不明、クロマツ、アカマツが根本で一体化し、地上で枝分かれしている合体木である。共によく茂っているので「相生の松」といわれる。目通り4. 1m、樹高15mである。

15 天　桐生城跡日枝神社のクスノキ群

神社拝殿前のクスノキで、樹齢600年の3本と樹齢300年の1本がある。目通り3. 6m～4. 7m、樹高33mある。観応元年(1350)桐生国綱が神木として献じたと伝えられる。

16 天　野の大クスノキ

推定樹齢600年の常緑高木のクスノキで、目通り7.7m、樹高27m、枝張り30m、幹は4つの支幹に分かれる。木材は放香が強く、カンフルを含み強心剤や樟脳に利用される。

17 天　新里のサクラソウ群落

サクラソウ科の多年草で、標高450m付近の鏑木川上流やその支流に自生する。4月下旬～5月中旬に紅紫の花を咲かせる。赤城山舟原地区が県指定されている。

18 天　黒保根栗生神社の大スギ

栗生神社の御神木とされ、境内中央にある口述樹齢1200年の大杉である。目通り7.1m、樹高53m、枝張り25mにも及ぶ巨木で、正月に氏子によりしめ縄が飾られる。

19 天　崇禅寺のイトヒバ

樹齢不明、サワラの栽培変種で、目通り6.6m、樹高25m、枝張り17mのイトヒバである。寺は元久2年(1205)に開基したと伝えられ、他に県指定の木彫阿弥陀如来像がある。

20 天　賀茂神社のモミ群

マツ科、樹齢不明のモミの木3本で、目通り3.3～4.2m、樹高40～54mある。1000年以上の歴史がある賀茂神社のモミ群は、他の照葉樹とともに森を構成している。

21 史　彦部氏屋敷

国重要文化財、彦部家住宅を囲む土塁と濠などをいう。土塁内の中央に主屋、南に長屋門を配し、北隅の土塁を一段高くした櫓台の西に屈折した石垣の搦手口がある。

22 史　山上城跡

12世紀後半に山上氏が築城したといわれ、戦国の変遷を経て、16世紀末に廃城。城は並郭構造で笹郭・北郭・本郭・二の郭・三の郭・南郭が直線に並び土塁、空堀もある。

23 史　中塚古墳

推定7世紀後半に築造された、傾斜地にある一辺約約40mの方墳で周堀をめぐらす。精巧なきり石切積による横穴式の両袖型石室で、新川臣の墳墓と推定されている。

▲ 市指定文化財　100件

1 重　光性寺木彫不動明王像

平安時代(藤原末期)につくられた高さ94cmの木造立像である。寺伝では文化14年(1817)に京都から動座したと伝えられている。本尊以外の持物、台座、厨子は後世の作である。

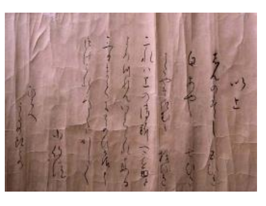
2 重　前田利家新田老母宛書状

前田利家が由良成繁の妻輝子(77歳)に宛てた功労の書状である。輝子は天正18年(1578)の豊臣秀吉の小田原城攻めの際、前田利家、上杉景勝の幕下に入り松井田城を攻略した。

3 重　浄運寺安土宗論記録

浄運寺開山の玉念上人が天正7年(1579)近江国(滋賀県)安土城下浄厳院で織田信長の命により浄土宗僧と日蓮宗僧と宗論し、日蓮宗側は負けて詫証文を取られた。その時の記録である。

4 重　彦部家文書仁田山紬注文書



足利第13代将軍義輝(1546～1565)の侍女小侍従から彦部雅楽頭晴直に宛てた桐生織物の注文書である。当時すでに桐生地域で紬等の織物が生産され、京都に出回っていたことがわかる。

5 重　東禅寺角塔

建武5年(1338)につくられた上部がやや細くなった底辺28cm、高さ87cmの凝灰岩の角塔で、四面に「南無阿弥陀仏」と陰刻されている。角塔は板碑と同じ一種の供養塔である

6 重　須永の地蔵菩薩像

応永16年(1409)につくられた高さ70cmの石地蔵で、自然石の一面を研磨し下部に六角形の台座を描きその上に蓮華座が陰刻されている。上部には地蔵菩薩の座像が陽刻されている。

7 重　須永の弥陀三尊像

文明12年(1480)につくられた高さ55cm、安山岩の石仏である。一面を研磨し中央に阿弥陀如来立像、左右に観音・勢至菩薩を半肉彫りしてある。形は中央が高い舟形光背である。

8 重　観音寺石幢

造永正9年(1512)の高さ150cm、安山岩の石幢である。塔身上部の龕部(がんぶ)に阿弥陀如来と6地蔵が彫刻されている。銘文に「大日本国‥」と刻まれ、珍しい。

9 重　小倉の石幢

造大永3年(1523)、高さ195cmの安山岩の石幢である。塔身上部の龕(がん)部に阿弥陀如来と6地蔵が彫刻されている。石幢造立の主旨は供養または逆修である。

10 重　重足寺の石幢

造天文16年(1547)、高さ155cmの安山岩の石幢である。龕部に阿弥陀如来と6地蔵が彫刻されている。宝珠以外は建立当時の形態をそのまま残しており完全に近い。

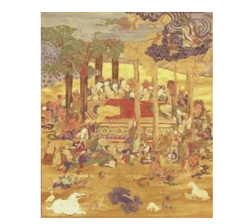
11 重　栖松寺石幢

大永2年(1522)につくられた高さ105cm(台座、宝珠欠損)の安山岩の石幢である。7角形の龕(がん)部の6面に地蔵尊、1面に阿弥陀如来像が彫刻されている。笠石の中央が膨らんでいる。

12 重　石鴨の道祖神

宝暦4年(1754)につくられた高さ102cmの双体道祖神である。台石の上に亀の形の台座を載せ、舟形光背状の碑石に、中央で手をつないでいる男女2体の姿を半肉彫りしている。

13 重　観音院涅槃図



元治元年(1864)に岩本一僊により寄贈された涅槃図である。一僊は渡辺崋山の妹の長子として桐生に生まれ、崋山から画技を習う。両親の死後追善のためにこの涅槃図を描いた。

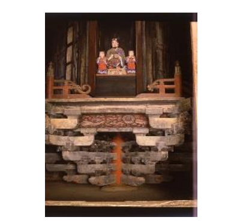
14 重　千手寺石幢

天文17年(1548)につくられた高さ164cmの安山岩の石幢で、相輪、屋蓋、龕部、中台、幢身、基礎からなる。龕部は7角形で1面に阿弥陀仏を、他の面に6地蔵が彫刻されている。

15 重　法楽寺御正体

室町時代初期の木彫の本地仏3体である。神鏡に仏像彫刻を施したもので、像は毘沙門天、吉祥天、善膩師の三尊となる。本体、光背、台座とも全て一木で、彫りの深い彫刻である。

16 重　鳳仙寺輪蔵



伝天明3年(1783)、手押しで回転する1辺1. 8mの8面体輪蔵である。8面の経架の中央に双林大士を安置し、残る7面には延宝7年(1679)に板行の鉄眼版一切経全6,700巻を蔵する。

17 重　賀茂神社塚出土の環頭大刀

把頭
附　埴輪女子像
加茂神社塚出土の環頭大刀

推定古墳時代(6世紀後半)の太刀である。刀身は40cm程が遺存し、把頭は鋳銅鍍金の単龍環頭である(柄の先に、一匹の龍が鋳造されものを付ける)。附に上半身の埴輪女子像がある。

18 重　鳳仙寺山門

宝永元年(1704)に建設された3間1戸の禅宗様式の楼門で、瓦葺入母屋造である。正面の両脇間に金剛柵を設け、中に増長天、持国天を配する。桐生市域には類を見ない大きさである。

19 重　鳳仙寺梵鐘

寛永18年(1641)に鋳造された桐生最古の梵鐘である。高さ117cmで乳、袈裟襷、撞座高などに古式の遺風が見え、形姿とも優美で鋳技も優れ、随所に江戸時代初期の特徴を残している。

20 重　大雄院山門

寛永3年(1743)に建設された3間1戸の楼門である。入母屋造で現在は銅板葺き。四天王像が配された市内唯一のもの。大雄院は天正11年(1583)由良氏の家臣藤生善久が開基した。

21 重　観音寺山門

17世紀初期に建設された1間1戸四脚門で、切妻造、茅葺である。両開き形式で、正面右側の扉には入り八双金具が付き、正面左側と両脇の扉は失われている。桐生の古建築の一つ。

天満宮末社春日社
国重文指定により市指定文化財解除

22 重　矢野本店店舗及び店蔵

店舗は大正5年(1916)に建築され、出桁造で2階に格子戸が付く。店舗北に築明治23年以前の土蔵の店蔵がある。矢野本店は寛永2年(1749)にここで店舗を構えた。

23 重　旧矢野蔵群　（桐生市有鄰館）

天保14年(1843)～大正9年(1920)に建設された10棟の蔵群である。中でも煉瓦蔵は市内最大の煉瓦造建物で、市内の芸術文化の発信の場であり、また町並み保存の拠点でもある。

24 重　旧模範工場桐生撚糸合資会社事務所棟

桐生市近代化遺産絹撚記念館
大正期に国内最大の撚糸工場であった旧日本絹撚(株)の事務所棟で、大正6年に建設された。外壁に大谷石を積んだ木造2階建ての建物で、現在は郷土資料展示施設

25 重　賀茂神社の石灯籠

永和4年(1378)につくられた高さ210cmの安山岩の石灯籠である。基礎・竿・中台・火袋・笠・請花・宝珠からなり、市内の造立年代の明らかなものとしては最も古い石灯籠である。

26 重　十王堂輪廻車付石幢

延徳2年(1490)につくられた高さ160cmの安山岩の石幢である。龕(がん)部に六地蔵を彫り出し、竿部に六道輪廻を表す石車を嵌め込んでいる。輪廻車のついた石幢では市内最古。

27 重　皆沢八幡宮本殿

築18世紀後半、1間社春日造　唐破風付き柿葺の八幡宮本殿である。軸部の素木に対し、組物の朱、尾垂木や木鼻、腰組下持送、手挟みの彩色など、その対比が鮮やかである。

28 重　鷹林寺山門

享保17年(1732)に建設された、1間1戸4脚　桟瓦葺の山門である。基礎、柱の粽(ちまき)、台輪、詰組といった細部に禅宗様が見られる。均整がとれた形態を成す。

29 重　浄運寺本堂

宝暦3年(1753)に建設された、6室構成の方丈系、寄棟造、桟瓦唐破風付き本堂である。建設当初は茅葺きであった。桐生新町の南端に位置し、桐生新町町立ての要の建築物である。

30 重　鳳仙寺本堂

鳳仙寺は由良成繁が天正2年(1574)に菩提所として開基し、現本堂は享保11年(1726)以前に改築された。市内では数少ない8室構成で、入母屋造、銅板葺きの曹洞宗本堂である。

31 重　長泉寺本堂

享保3年(1718)以前に建設された6室構成方丈形式、入母屋造、銅板葺きの本堂である。向拝を設けず簡素で、当初は茅葺き屋根で、昭和54年に銅板葺きにした。

32 重　桐生倶楽部会館

大正8年(1919)に竣工した、木造2階建、寄棟造瓦葺の建物で、玄関、煙突など要所にスパニッシュコロニアル様式を用いた建物である。織物で栄えた桐生を代表する社交施設である。

33 重　常広寺の弁財天堂

築推定江戸中期の方1間(約2. 1m)の寄棟、銅板葺きの弁財天堂である。向拝柱につく木鼻や紅梁上の欄間には精巧な彫刻が施され、天井には弁財天が描かれている。

34 重　赤城の百足鳥居

造天明2年(1782)、鳥居の島木に1. 3mの百足が陽刻された安山岩の鳥居である。神の住む山、赤城山へ登る東南麓の参道に建つ。新里、粕川、宮城、赤堀の人々の願いで実現した。

35 重　大梨子の磨崖仏

大久保の北爪吉太夫が安山岩に線刻した魔崖仏で、享和年間(1801～1803)作と伝わる。中央に千手観音菩薩、右に不動明王、左に地蔵菩薩が陰刻されている。

36 重　奥沢の石造大日如来坐像

元和7年(1621)に建てられた堂(火災消失)に収められていた、安山岩の大日如来坐像2体である。左は痛みが激しい。右は像高1.49m、体躯は丸形でどっしりとしている。

37 重　奥沢の木造大日如来像

室町時代(1338～1575)頃につくられたと考えられる、高さ50cmほど、一木造りの大日如来立像である。光背の上部と手首が欠損する。細身の体躯で、金泥はほとんど落ちている。

38 重　元町橋の供養塔

元町橋の架かる蕨沢川は水害が繰り返され周辺の人々は難儀を繰り返してきた。そこで永久橋の石橋を元禄14年(1701)に造った。その竣工を祝ってこの供養塔が建てられた。

39 重　野の六地蔵幢

室町時代初期(1350年頃)につくられたといわれる、四角形で高さ1. 82mの六地蔵である。塔は安山岩で2面に地蔵尊が2体ずつ、他の2面に1体ずつ陰刻されて六地蔵となる。

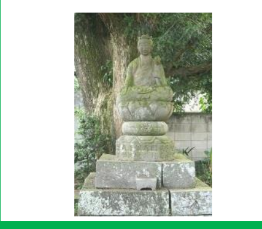
40 重　雷電山の笠塔婆

造推定鎌倉時代～室町時代(1185～1573)の凝灰岩の笠塔婆2基である。北側の1基は阿弥陀三尊像が半肉彫りされ、もう1方の塔婆は梵字による阿弥陀三尊像が彫られている。

41 重　善昌寺の五輪塔群

延元3年(1338)新田義貞が戦死し、その首を桃井次郎が持ち帰り、重臣の船田善昌が葬り、塔を建てて供養したと伝えられる。大きい1基は安山岩製で、義貞のものと伝えられる。

42 重　瀧興寺の虚空蔵菩薩



造安永5年(1776)、安山岩製の虚空蔵菩薩坐像である。基壇と基礎の上に安置され像の高さは0.9m、基壇からは2. 7mある。瀧興寺は元和3年(1617)に尊光が開基したといわれている。

43 重　善龍寺の山門

江戸初期に上野寛永寺の裏門を移設したといわれる、1間戸4脚、金属板葺き総欅造りの山門である。正面には左甚五郎作と伝わる龍の彫り物がある。

44 重　善龍寺の宝篋印塔

造延享2年(1745)、宝篋印塔(ほうきょういんとう)である。これは、仏の全身舎利を奉蔵するため、宝篋印陀羅尼経を納めた供養塔で、塔身に梵字で金剛界の5仏が刻まれている。

45 重　高縄の磨崖仏

鎌倉時代に彫られたと推定される磨崖仏である。この岩は赤城山の泥流により運ばれてきたもので、そこに阿弥陀如来を中心に、右に観世音、左に勢至菩薩が半肉彫りされている。

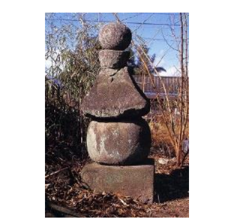
46 重　小林の大日堂

安山岩の大日堂である。基壇・基礎の上に堂身がのり、内部に60cmの大日如来が安置され、その上に笠石、相輪がのる。総高さは2. 6m。祥雲寺の火災により由来などは不明。

47 重　祥雲寺の延命地蔵

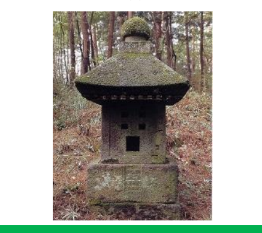
寛政11年(1799)に建立された、祥雲寺開山の輝翁善陽の姿を菩薩像とした、延命地蔵で、安山岩製の像の高さが1.4mの立像である。全体的に肉付きが良く、豊満な面相をしている。

48 重　後閑の五輪塔



推定室町時代初期、凝灰岩製の五輪塔である。高さ1. 63m、全体的にどっしりとした形で火輪の笠石はやや反りが見える。五輪塔は供養塔で、平安時代からつくられるようになった。

49 重　大久保の石造大日堂



寛永2年(1625)に建立された安山岩、高さ1. 47mの大日堂である。新里町には大日信仰の跡が数多く残っており、かつて多くの人々に厚く信仰されていたことを物語っている。

50 重　龍真寺の石造地蔵菩薩坐像

天明元年(1781)建立の安山岩でつくられた、地蔵菩薩坐像である。像の高さは66cm、全体で2. 48m、顔は丸く、まゆは三日月形に陰刻され、目は軽く閉じている。

51 重　瀧興寺の宝篋印塔

造寛政8年(1796)の宝篋印陀羅尼経を納めた供養塔である。安山岩で高さ3. 65m、願主北爪藤七は先祖の供養と家運の繁栄、並びに生けるものの幸せ、死せる諸々の成仏を願った。

52 重　山上塚越の道祖神

造元文2年(1737)、肩を組んで手を握りあった仲の良い男女が半肉彫りされた双体道祖神である。安山岩で塔身の高さ78cm、道祖神は悪病などが入ってこないよう村境に建立された。

53 重　吉田家の古文書

新川村の名主で富農の吉田家に伝わる古文書で、地方文書、経営帳簿、戸長役場文書や横浜で生糸売込商として成功した吉村屋幸兵衛の書簡、帳簿などで8, 806点にも及ぶ。

54 重　鏑木の木造虚空蔵菩薩

推定室町時代から江戸初期頃につくられた、木造の虚空菩薩坐像である。台座からの総高さは55cm、寄せ木造りで全体に金泥が塗られていた。鏑木家の墓地のお堂に安置されている。

55 重　鏑木の木造大日如来

造推定江戸時代とされる木造の大日如来坐像である。高さ42cm、目は切れ長で半眼、鼻筋が通り品位ある面相をなし、全体に金泥が塗られている。鏑木家の墓地のお堂に安置されている。

56 重　広間地の石造薬師如来

建立年代不明の凝灰岩、高さ59cmの薬師如来である。半肉彫りで手に宝珠を持つ椅像(腰掛けている)と思われる。大医王仏ともいわれ、病苦をいやし苦悩を除いてくれる如来である。

57 重　広間地の観音菩薩

建立年代不明の凝灰岩、高さ83. 5cmの観音菩薩立像である。浮彫り状で、体躯は丸みを帯び、頭部に対し胴部が短い。面立ちは品位があり左手に水瓶を持つ。刻字は見あたらない。

58 重　新川の歌舞伎舞台下座

江戸時代後期に製作された屋台の形をした移動式下座で、歌舞伎舞台の左右に置かれ、音曲を奏でる場所となる。絢爛豪華で、2対ある内の1台が郷土資料館に展示されている。

59 重　新川の八坂神社神輿

慶應元年に製作された八坂神社の神輿である。塗り神輿で、丸彫りの昇り龍、下り龍、阿形、吽形などの他、高肉丸彫りの彫刻で埋め尽くされ、その表面に金箔が押されている。

60 重　赤城型民家

屋根裏を養蚕に利用するために、主屋の屋根の中央を書き取って光と風を取り入れた民家である。赤城山麓に多く分布することからこう呼ばれる。移築された民家で、4間取りで土間が広い。

61 重　北条氏直の古文書(感状)

天正12年(1584)黒川勢と新田、桐生勢の戦いの戦功を賞し、北条氏直から目黒織部丞に送られた感状(感謝の礼状)である。中世戦乱期の動きや、生き様が分かる貴重な資料である。

62 重　北条氏直の古文書(感状)

天正12年(1584)黒川勢と新田、桐生勢の戦いの戦功を賞し、北条氏直から松井新左衛門に送られた感状(感謝の礼状)である。中世戦乱期の動きや、生き様が分かる貴重な資料である。

63 重　板碑

鎌倉時代(1基に正和4年(1315)と刻印)と推定される4基の板碑である。黒保根地区では最古で、連座の上に梵字が刻まれ、円型光背がある。近親者の菩提供養のためと推察される。

64 重　八木原龍禅寺の喚鐘

宝永4年(1707)に鋳造された喚鐘(小型の梵鐘)である。戦中に供出したが大阪寝屋川の明王院に残されていた。喚鐘に龍禅寺の名があることから平成6年に当寺に返された。

65 重　医光寺本堂の彫刻欄間

築宝暦3年(1753)の本堂にある、総透かし彫りの24枚の欄間彫刻で、彫師は関口文治郎とその弟子達と推察できる。本寺は弘仁11年(820)に弘法大師が東国行脚の折に開山したと伝えられる。

66 重　関口文治郎の墓

享保16年(1731)上田沢村沢入に生まれ、彫物師となる。石原吟八郎に師事し、宝暦2年(1752)に師の片腕となり妻沼聖天宮の本殿彫刻を完成させた。名作が多く、77歳で亡くなる。

67 重　関口文治郎の半鐘

名彫物師関口文治郎が宝暦2年(1752)、妻沼昇天宮の本殿彫刻の大願成就を願って、出生地沢入観音堂に寄進した半鐘である。鋳物師は常鑑寺の梵鐘も鋳造した丸山善太郎である。

68 天　椿森のツバキ群

周東家の墓地に群生するツバキ科ツバキ3本である。樹齢は不詳。最大樹木の樹高9m、枝張り10m、目通り3mで春に赤色花をつける。この墓地には鎌倉期と推定される五輪塔も見られる。

69 天　二渡のカヤ

イチイ科のカヤで、推定樹齢450年、樹高31m、枝張り26m、目通り5. 5mの巨木である。カヤは雌雄異株で、この木は雄株のため種子はできない。関東以西に産する高木である。

70 天　泉竜院のシホウチク群

イネ科のシホウチク、シカクダケで、一般のタケ類が円柱形の茎を持つのに対し、このタケは鈍四稜形である。中国原産であるが、植物の進化の上から見ても興味深い。来歴は不明。

71 天　白髭神社のシラカシ

ブナ科ホソバカシ(シラカシ)に属し、本州、四国、九州の山野、特に暖地ほど多く自生する常緑高木で造園樹として植えられる。樹高25m、枝張り24m、目通り4. 3mの巨樹である。

72 天　白瀧神社のケヤキ

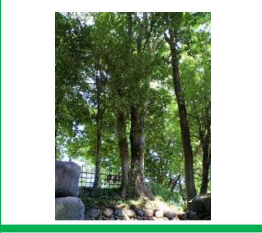
ニレ科ケヤキ属で樹齢300年以上、樹高35m、枝張り30m、目通り6. 1mで白瀧神社の背面に生えている。ケヤキは暖帯下部、本州以南に分布する、日本を代表する落葉樹の一つである。

藍原家のイロハカエデ
滅失により指定解除

73 天　諏訪神社のハルニレ

ニレ科ニレ属で樹齢200年以上、樹高15m、目通り0. 95mのハルニレである。ハルニレは北海道から四国、九州に分布する落葉樹で、北地に多く、南部に多いアキニレとは対照的である。

74 天　彦部家の合体木



重要文化財彦部家住宅の北側土塁に生息する、ムクノキ(落葉樹)、シラカシ(常緑樹)、エノキ(落葉樹)の3本が合体した樹木である。樹高32. 6m、根元周囲2. 86m、目通り3. 2mである。

75 天　瀧興寺法印のカヤ

安永元年(1772)第12世尊盛和尚が読誦していた時、花瓶のカヤに根が生えたので境内に植えたと伝えられている。樹高20m、目通り3. 8mある。カヤはイチイ科の常緑針葉樹である。

76 天　薮塚家の大ツゲ

薮塚家の敷地にある、樹齢推定500年のツゲ科の常緑低木である。樹高3m、枝張り4m、目通り1. 1m。薮塚家は新田義重から5代目を祖とし、由良成繁の圧力を避けここに定着した。

77 天　鏑木のアラカシ

宮田家地内にある樹齢約400年のアラカシである。樫はコナラ属で、一般にカシといえばアラカシをいう。樹高20m、枝張り22m、目通り6. 7mの巨木で今なお樹勢は旺盛である。

78 天　サクラソウ

サクラソウ科の多年草で、新里町では標高450m付近の鏑木川上流やその支流に自生する。4月下旬～5月中旬に紅紫の花を咲かせる。花弁は5つに裂け、その一つに浅い切り込みが入る。

79 天　土橋のおかめサクラ

樹齢約400年のシダレザクラである。樹高9m、枝張り9m、目通り4mで幹の南側半分は枯死、中心部は空洞となっている。「おかめ」という美人にちなみ「おかめ桜」と呼ばれる。

80 天　板橋のヤエツバキ

蕪木家の墓地にあり、花が赤い八重咲きのツバキである。樹高12m、枝張り12m、目通り3. 5mで地上1. 2mの部分から枝分かれして、まるで大きな洋傘を開いたように茂っている。

81 天　藤生沢のお角サクラ

当主が建久7年(1196)に植えたと伝えられるシダレサクラである。初代のサクラは昭和23年に枯れ、現在は2代目。樹高10m、目通り3. 2m。娘の「お角」にちなんで「お角桜」という。

82 天　沢入観音のイボ石

中生代ジュラ紀の放散虫化石の地層の一部が剥がれ川を下る過程で角が取れ化石が表面化したものである。イボがたくさん付いたように見えるため、イボ石と呼ばれる。

83 無　賀茂神社太々神楽

伝文化12年(1815)に発起といわれる、宮比講社神楽(神田の宮比という神社の講で上演されていた神楽)である。昭和48年に神楽保存会が組織された。春と秋の例祭に奉納される。

84 無　白瀧神社太々神楽

白瀧神社に伝わる、起源不詳の神誠流大和太々神楽である。現在伝えられている神楽は、式舞5座、興舞4座の計9座である。神楽保存会が組織され、毎年8月の例祭に奉納される。

85 無　桐生和紙生産技術

江戸時代頃より生産される桐生和紙の生産技術である。和紙の生産が急減し桐生紙も梅田の星野家だけに受け継がれている。県内の紙漉の地域伝統産業は桐生紙一件のみとなった。

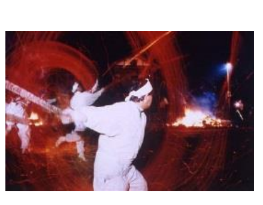
86 無　皆沢地区の百万遍念仏

浄土往生を願い大きな数珠を用いて百万回念仏を唱える祭事で、江戸時代から続くといわれる。集落からの悪疫退散を願い3ヶ所の辻で8月17日以降の日曜日に実施される。

87 無　桐生木遣

木遣りは鳶を主体とした威勢の良い、粋でいなせな姿の火消しが歌うものである。桐生の木遣りは江戸から伝わるが、江戸よりテンポが速い中間(ちゅうま)で、祭事や各種慶事に披露される。

88 無　賀茂神社御篝神事



伝江戸時代末期から実施という、2月3日の豆まきに行われる神事である。お祓いを受けた紙人形などと共に、お焚き上げされた薪を、太鼓の音に合わせ大声で高く投げ合う奇祭である。

89 無　地蔵盆百万遍念仏

この地区に伝わる、大きな数珠を用いる、百万回念仏である。地蔵盆の日(毎年8月24日)に行われ、悪疫退散を目的とせず、先祖に地区の人たちの平穏な姿を見せるものである。

90 無　涌丸獅子舞「ささら舞」

涌丸山医光寺境内社赤城神社に奉納される獅子舞である。ささらという楽器を用いることから「ささら舞」と称している。伝安永年間(1772～1780)から奉納。無病息災、五穀豊穣を祈る。

91 無　前田原獅子舞

前田原の十二神社に奉納される獅子舞である。江戸中期頃に愛知県から導入したと伝えられるが、資料は消失したため定かでない。五穀豊穣と家内・部落の安全を願い秋に奉納される。

92 史　桐生氏累代の墓

正平5年・観応元年(1350)桐生国綱が浄土宗西方寺を建立する。3代豊綱が臨済宗に改めたが、10代まで菩提所となっている。桐生氏累代の墓は5輪塔14基、層塔1基ある。

93 史　梅原館跡

平安時代に桐生を所領した、足利俊綱の家臣桐生六郎の居館であったといわれる。その後、桐生国綱によって桧杓山城が築かれ領主の居館が城山の麓に移り、ここは下屋敷になった。

94 史　日本織物(株)発電所跡及び煉瓦積遺構

明治20年(1886)に日本織物(株)が創設され、工場の動力と照明のために明治22年に運転を始めた発電所跡である。煉瓦積み遺構はその水路下にあり、通路にも使った。

95 史　桐生桧杓山城址

観応元年(1350)桐生国綱が築いたとされる城跡である。標高361mの本丸を斗口とし、二の丸、三の丸、を柄とする柄杓型をなし、堀切は深く、武者屯などの城郭が残っている。

96 史　由良成繁の墓

桐生氏が治めていた桐生を天正元年(1573)に攻略した金山城主由良成繁の墓である。天正2年(1574)に桐生に入り、鳳仙寺を建立し、天正6年(1578)に亡くなる。

97 史　小林の天神古墳

推定古墳時代後期とされる、直径40mほどの円墳である。石室は横穴式袖無形で、遺物に大刀、鉄鏃(てつぞく)、金環、須恵器、埴輪(円筒、家型、人物頭部)などが発見された。

98 史　桃井塚

延元3年(1338)に新田義貞が戦死し、その老臣桃井次郎が首を持ち帰り、善昌寺に渡した後、この石の上で自害した。その石や灯篭、墓碑などがある場所である。

99 史　谷津館跡

新川地方の土豪の城跡といわれ、そこに新田氏の流れの薮塚家が移り住んだ。四方を土塁で囲み、その外に深さ約2mの空堀が廻っている。正応年間(1288～1292)の石祠がある。

100 史　長者塚古墳

築造推定7世紀後半、傾斜地にある長軸30mの五角形墳である。石室は南に入口を持ち、羨門と玄門を持つ横穴式両袖型で、石は精巧に加工されている。遺物は盗掘された。

★ 登録文化財（国）　34ヶ所

桐生倶楽部会館

桐生市指定重要文化財に指定されたため成27年4月14日付で登録抹消

1 桐生織物会館旧館　（桐生織物記念館）

昭和9年(1934)に桐生織物同業組合の事務所として建設される。木造2階建て青緑色の瓦葺、外壁はスクラッチタイル張りである。平成13年に桐生織物記念館に改称、平成24年に改修された。

2 水道資料館(元宿浄水場旧事務所)ほか4件

昭和7年(1932)に建設された、元宿浄水場旧事務所、喞筒(ポンプ)室、急速濾過場、調整池、接合井である。渡良瀬川の地下水を取水し、ここで濾過処理後、水道山に送水し、市内に配水する。

3 水道山記念館(旧配水事務所)

配水事務所として昭和7年(1932)に建設された。木造平家建て、寄せ棟造スペイン瓦葺、外壁スクラッチタイル張りの山荘風の建物である。昭和61年に改修工事が行われ、公開されている。

4 桐生市水道局高区配水池ほか3件

元宿浄水場からこの低地、高地配水池に水道水が押し上げられ、ここから自然落下で市内に送水される。量水室は低地、高地配水池の水位を知るために水位計を設置している建物である。

5 桐生市立西公民館本館(旧水道事務所)ほか1件

桐生市役所の水道事務所、倉庫として昭和7年(1932)に建設された鉄筋コンクリート造の建築物である。その後事務所の3階に議場を増築する。市庁舎が織姫町に移転し、ここは公民館となった。

6 群馬大学工学部同窓記念会館ほか2件

大正5年(1916)群馬大学理工学部の前身である桐生高等染織学校の講堂及び関係施設として建設された。講堂は木造2階建て、瓦葺、外壁下見板張りの教会風、ゴジックスタイルの建築物である。

7 旧株式会社金芳織物工場　事務所ほか1件

旧金芳織物工場の鋸屋根工場、事務所である。鋸屋根工場は大正8年(1919)に建設された、外壁煉瓦で、事務所は昭和6年(1931)の洋風建物である。32の旧金谷家住宅と一体。

8 森合資会社事務所ほか2件

明治前半から金融業と土地経営で富豪になった森家の擬洋風事務所(大正3)、土蔵(明治前)、石蔵(大正3)である。また敷地内には主屋、土蔵などが建ち歴史的景観が保存されている。

9 MAEHARA20th(旧合名会社飯塚織物工場)

合名会社飯塚織物工場として昭和7年(1932)頃建設された外壁大谷石の鋸屋根工場である。北に向かって敷地が下がり、北側の基礎が高い。平成16年より私設のクラシックカー博物館となる。

10 寺内家住宅旧別荘

12の旧松岡商店主の住宅として昭和12年(1937)に建設され、別荘と呼ばれていた。木造2階建、入母屋造、瓦葺、外壁腰部下見板張り、外壁漆喰塗りの和洋折衷住宅である。

11 旧松岡商店事務所ほか2件

昭和10年(1935)建設の輸出織物買継商　松岡商店の事務所、蔵及び住宅である。事務所は木造洋風の商店建築で、蔵は事務所と住宅の間に建ち、住宅は近代和風の建物である。

12 無鄰館(旧北川織物工場、事務所、蔵、塀ほか1件)

大正5年(1916)及び同年頃建設された、旧北川織物工場の鋸屋根工場、事務所、蔵 、煉瓦塀などである。。桐生新町の中で織物産業で栄えた桐生の織物会社の様相が良く残っている。

13 中村弥市商店店舗ほか6件

明治27年建設の奥座敷から昭和12年頃までに建設された店舗、住宅全7件である。中村弥市商店は明治初期に来住し、穀屋から始め生糸で成功した商家で、桐生新町の良好な景観になっている。

14 上毛電気鉄道西桐生駅舎ほか1件

昭和28年(1953)に建設された、木造平家建て駅舎と駅プラットホーム上屋である。中央改札場をマンサード屋根とし、そこに切妻の待合室と事務所が取り付く。上電は昭和3年に開業し、前橋と結ぶ。

15 旧尾関家住宅主屋

昭和5年(1930)に建設された和風住宅に洋間の書斎を持つ、和洋折衷住宅である。この地は昭和元年に住宅地として開発された高級住宅地で、今でも多くの和洋折衷住宅が残っている。

16 旧曽我織物工場

築大正11年(1922)、外壁大谷石、木造トラス構造、鉄板葺き、5連の鋸屋根工場である。ディーゼル自家発電機を備え、蒸気により暖房、加湿も行っていた。22の曽我住宅と同敷地。

17 旧堀祐織物工場

昭和10年頃建設された、外壁大谷石、小屋組木造トラス造、桟瓦葺3連の鋸屋根織物工場である。33の堀家住宅とは同一敷地であった。美容室に改装され、活用の好事例となっている。

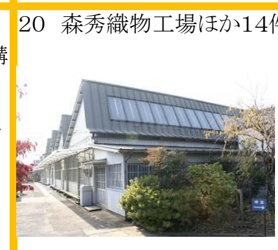
18 金善ビル

大正10年((1921)頃建設された、鉄筋コンクリート造、地上4階建、地下1階の事務所ビルである。1階は石張り風とし、他は白タイルを張り、玄関上方に装飾を付ける。初期鉄筋コンクリート造の好事例。

19 後藤織物主屋ほか10件

明治3年(1870)に居を構え、織物業で成功した。明治前期から昭和25年に建設された住宅、工場など織物関連施設全11件で構成される。戦中に多くが供出、解体されたが、戦後に再建した。

20 森秀織物工場ほか14件



大正13年(1924)に工場を構え、昭和27年(1952)頃までに建設された織物業一連全15施設から成る。御召専門の機屋で、工場の一部を織物博物館として解放し、また染色や手織りも体験できる。

21 曽我家住宅主屋4件

明治後期から大正11年(1922)頃までに建設された旧曽我織物工場社主の住宅、他である。創建時の姿を良く残す。また、北側の壁を防火壁にしている。17の旧曽我織物工場と同一敷地。

22 須藤家住宅主屋ほか2件

明治前期から大正10年頃までに建設された、創業明治9年(1876)の金善織物会社社主の住宅である。特徴は吹き抜けのサロンを有し、玄関に4本のエンタシスの円柱を持つことである。

23 平田家住宅旧店舗ほか3件

明治33年(1900)造の旧店舗、旧店蔵と大正2年(1913)造の主屋と土蔵である。店舗と店蔵、生活空間である主屋が分離し、その奥に土蔵を設ける。桐生を代表する町家建築である。

24 島田商店店舗ほか6件

島田商店は明治後期から昭和28年(1953)にかけて建築された店舗、住宅関連建築物全11件で構成される。煙草、雑貨を扱い徐々に建て増しした。石蔵は歯科医院に改装され活用されている。

25 藤生家住宅主屋ほか16件

藤生家は戦国時代由良家の家臣で、成繁の死後は桐生城の城代となる。江戸時代は下広沢村の名主を務め、機業家となる。江戸時代後期から大正時代までの住宅など全15施設がある。

26 荻原家住宅主屋ほか2件

江戸時代から明治20年代まで織物業をしていた社主の住宅で、明治10年(1877)に建設された主屋、土蔵、門及び土塀である。表門と土塀、その奥の土蔵や主屋の屋根が往事の景観を残す。

27 上毛電気鉄道渡良瀬川橋梁

上毛電気鉄道は昭和3年に開通した赤城南麓を東西に走る前橋と桐生を結ぶ私鉄路線である。この橋梁は渡良瀬川に架かるもので157. 28m、橋脚7で上電では格段に規模が大きい。

28 わたらせ渓谷鐵道小黒川橋梁ほか6件

この鉄道は足尾銅山の銅を運ぶために明治44年(1911)に開業した。その後多くの変遷を経て、わたらせ渓谷鐵道となる。その駅舎、橋梁、トンネルなどの全37施設の内、桐生市分6施設である。

29 金子家住宅 蔵ほか3件

金子織物(株)の住宅、織物関連建築物である。明治20年造の土蔵の他戦中戦後の鋸屋根工場、宿舎、倉庫、染め場が建ち、繊維産業で栄えた桐生市における、織物会社の様相を良く伝える。

30 小林家住宅(旧小武織物有限会社主屋ほか5件

昭和初期から戦後にかけて、建設された小武織物(有)の住宅及び織物関連建築物である。主屋から連続する5連の切妻工場、寄宿舎、倉庫と堤防を兼ねた石垣と板塀が見事である。

31 旧金谷家住宅主屋ほか2件

旧金芳織物工場の主屋と蔵で、8の鋸屋根工場などと連続している。主屋は昭和6年(1931)に建設された和風建築物で、他土蔵などがある。繊維産業で栄えた織物会社の様相が良好に残る。

32 旧堀家住宅主屋

旧堀祐織物工場社主の昭和2年(1927)建設の木造住宅と昭和4年の鉄筋コンクリート造の蔵である。純和風の主屋にアールデコの特徴を持つ洋室が付く。18の工場とは同一敷地であった。

33 旧赤城山鋼索鉄道赤城山頂駅駅舎及びプラットホーム

赤城山頂に建設された東武鉄道路線網を構成したケーブルカー終着駅。山頂側を正面に駅舎を建て背面に階段状のプラットホームをつくる。厳しい立地条件のもとで空間と機能を巧妙にまとめた戦後の観光施設。

34 日本基督教団桐生教会教会堂

昭和5年 (1930) 建築
市内に現存する最古の教会建築。同教会の信者で教会堂建設に尽力した堀祐平氏も、その博愛精神を自身が経営する堀裕織物工場の社員教育に取り入れている。